狐火の誘い

－喜連川恵氏と登恵－

早見　俊

一

天明八年（一七八九）正月の二十五日、下野国喜連川藩八代目藩主、喜連川恵氏は御所を抜け出し、宿場を歩いていた。

喜連川宿は江戸からおおよそ三十六里、奥州街道二十番目の宿場である。城下町と兼ねており、武家屋敷の連なる一帯、町人地と本陣や旅籠、茶屋が整然と区画されている。

お忍びゆえ、恵氏は供も連れず菅笠を被り、羽織、袴の略装だった。暦の上では春を迎えているが紅黒い雲が垂れ、今にも雪が降ってきそうな雪催の昼下がりである。

遠く山鳴りが聞こえ、寒風が吹きすさんでいるが宿場は賑わっている。参勤交代が行われるのは、外様大名が四月、譜代大名は六月か八月、従って今は馬方や駕籠かきの他に行商人などの旅人が旅籠や茶屋に出入りしている。

寒空にもかかわらず、子供たちが元気に遊び回り、笑い声を上げるのを見ると恵氏の足取りも軽くなった。宿場を南北に貫く十七町程の大通りを抜け、荒川の堤に到った。

身を切るような川風に吹かれながら恵氏は河原に降り立つ。

河原を歩き、板葺き屋根の小屋に入った。

小上がりの板敷に切られた囲炉裏で盛んに薪が燃やされ、凍えた身体を歓迎してくれた。

菅笠を脱いで板敷に向かう。

恵氏は数え三十八、髪は黒々と艶めき血色がいい。それに加えてぴんと伸びた背筋、凛と張りのある声音ゆえ、役者顔負けの舞台映えがすることであろう。

主が深々と腰を折る。

「権兵衛、美味い魚を頼む。それと、酒もな」

板敷に上がり、恵氏は気さくに声をかけた。

「御所さま、いつもあんがとさんでごぜえます」

権兵衛は破顔した。顔中の皺が深まり、目尻が下がる。その笑顔が恵氏への畏敬と親しみを伝えていた。

喜連川家は五千石という小大名、いや、徳川三代将軍家光以来、一万石以上が大名とみなされることを思えば、大身の旗本並の石高だ。それにもかかわらず、藩主は、「御所さま」あるいは、「公方さま」などと征夷大将軍と同じ尊称で呼ばれる。なにも喜連川宿だけで呼ばれているわけではない。「御所」「公方」の称号は徳川幕府から許されていた。

異例の待遇がなされるのは喜連川家の歴史にある。

喜連川家の先祖を辿(たど)れば、室町幕府初代将軍足利尊氏にゆき着く。尊氏は京都に幕府を開いたが、鎌倉幕府滅亡後の鎌倉が関東武士団を束ねる重要拠点と考え次男基氏(もとうじ)を派遣した。基氏は鎌倉公方と称され、基氏の子孫が鎌倉公方を受け継ぎ関東に勢力を築いた。

やがて、京都の幕府と対立するようになり、室町幕府六代将軍義教(よしのり)によって時の鎌倉公方持氏(もちうじ)が征伐された。持氏の遺児も殺されたが、かろうじて赤子であった成氏(しげうじ)のみは許され、成人してから鎌倉公方となり、下総(しもうさ)の古河に移った。このため、持氏の子孫は古河公方と呼ばれるようになった。

戦国乱世となり、古河公方家は衰退したものの、豊臣秀吉によって保護され、関ヶ原の合戦の後には徳川家康が徳川将軍家の客分として保護した。

喜連川家は天下でただ一つ、将軍の臣下(しんか)ではない大名なのだ。

従って、わずか五千石、大身の旗本の禄高(ろくだか)程度の家にもかかわらず、参勤の義務はなく、当主は、「公方」または「御所」と呼ばれている。

まずは酒だという恵氏の要望で権兵衛は五合徳利に入れた燗酒(かんざけ)を持って来た。大きめの湯呑が添えてあり、焼き干しを炙(あぶ)ったイワナが入っている。権兵衛は湯呑に燗酒を注ぎ、土間に下りた。

骨酒である。

「御所さまのお好きな鮎は、しばらくお待ち頂かねえと」

権兵衛に声をかけられ、

「楽しみじゃのう」

恵氏は笑みを深める。

湯気と共に香ばしい匂いが恵氏の鼻孔と舌を刺激する。恵氏は右手に湯呑を持ち

「登恵(とえ)、早過ぎるぞ」

と、呟いた。

登恵とは高名な蘭方(らんぽう)医杉田玄白(げんぱく)の夫人にして、喜連川家の家老生沼(おいぬま)氏の養女であった。今朝、五日前に亡くなった、という報せが届いたのである。

恵氏も養子である。

生まれながらの喜連川家の人間ではなかった。伊予大洲(おおず)藩主加藤泰衍(やすみち)の三男であったのが、八歳の折に喜連川家に養子入りしたのだ。八歳の少年にとって名家での暮らしは不安に満ちたものだった。

そんな恵氏に優しく接してくれたのが登恵である。登恵は恵氏よりも九歳年上、いわば歳の離れた姉のような存在だった。

程なくして、登恵は恵氏との縁で大洲藩邸に迎えられ、恵氏の祖母に十年に亘って仕えた後、杉田玄白の妻となった。

登恵はここ三年、病に臥(ふ)せり、江戸に出た折に見舞いに訪れると笑顔を作ってくれたが、次第にその笑顔が痛々しいものになってゆくのが辛かった。

登恵と喜連川家で過ごしたのは僅(わず)か二年であったが、昨日のように思い出される。恵氏が悪戯(いたずら)をするたびに、

「若御所さま、おいたが過ぎますよ」

と、叱ってくれた。

また、幼さゆえ、狐憑(つ)きとか物(もの)の怪(け)といった迷信に怯(おび)えると、

「若御所さま、ご自分の目で見て、ご自分の頭で考えて物事はお決めなされませ」

優しさの中にも強い意志で諭してくれた。

そんな登恵の声が今も耳朶(じだ)の奥にしっかりと残っている。

登恵の思い出に浸りながら骨酒を味わった。

イワナの風味が酒に溶け込んで堪(こた)えられない。鮎ならもっと香り立ち、まろやかだと、益々鮎が恋しくなる。

権兵衛が串に刺した魚を持って来た。

ヒメマス、イワナ、ヤマメである。

囲炉裏端(いろりばた)に権兵衛が座り、串に刺された魚を焼くのを恵氏は骨酒を飲みながら見つめた。真っ赤に燃える炭と魚の焼ける香に恵氏は懐(なつ)かしさを覚える。

「登恵、冥途(めいど)で会おう」

ぽつりと呟いた。

ほろ酔いとなったところで、

「もう、いかんべえ」

権兵衛に食べごろだと言われ、恵氏はヒメマスの串を取り、がぶりと食いついた。

「美味い」

思わず笑みがこぼれる。

「そりゃ、いかっただ」

権兵衛がうれしそうに返すと、

「こでらんねえ」

下野訛(なま)りで恵氏は賞賛した。

権兵衛は顔中くしゃくしゃにして礼を述べ立てた

「権爺の焼いてくれる魚は格別だ。夏には鮎を食いに参るぞ。よし、鮎はわしが釣って来てやるか」

上機嫌で恵氏は請け合った。

「御所さま、御公儀(ごこうぎ)の道中奉行さまの見回りがあるべえ。わしら、どうすればよかっぺ」

不安そうに権兵衛は上目遣いになった。

十日前、幕府から道中奉行が巡検に訪れるという通達が届いた。道中奉行の役目は宿場の伝馬、飛脚の取締り、道路、橋整備の確認である。また、幕府直轄地、いわゆる天領の場合は訴訟も司った。喜連川宿はこれまで道中奉行の巡検など受けたことがない。

この為、道中奉行巡検の高札を立てると戸惑いや恐れの声が上がった。道中奉行は通常の役目に加え、宗門改も行うと連絡してきた為、宿場の寺には宗門改帳を用意させている。更に人別改帳の提出も求めていた。

また、道中奉行とは別に幕政を担う老中首座兼将軍後見役、松平越中守定信が鍛冶の運上金を払うよう書状を寄越した。道中奉行巡検と同様、これまで幕府から運上金を課せられたことはない。徳川家康から諸役免除の特権が与えられたのだから当然である。

定信は傾いた幕府財政を建て直す改革を推し進めている。宗門改を名目に、宗門改帳と人別改帳を手に入れて喜連川藩の財力を把握した上で、今後は鍛冶の運上金に加え、相応の諸役を課したいのだろう、と恵氏は見当をつけている。宗門改帳の開示はともかく、人別改帳を見せたり、鍛冶の運上金を払う気はない。

「なに、普段通りでよい。喜連川家は徳川家の客分、家臣ではない。道中奉行の顔色を窺う必要はない」

きっぱり告げると権兵衛はうれしそうに、「わかりました」と返事をした。

二

翌日、雪が積もった。前夜から降り、明け六つには止んだのだが、喜連川宿は一面の雪化粧である。

恵氏は宿場北の入り口に当たる田町にある長屋にやって来た。

間口九尺、奥行き五間という長屋だ。

九尺、二間の棟割り長屋が多い江戸よりも奥行きがある。人口過密な江戸よりも暮らしにゆとりを感じさせる。

そんな長屋で殺しが起きたのだ。豆腐売りの茂助という若い男が何者かに殺された。

喜連川宿始まって以来の大事件だ。これまで、殺人はおろか盗難事件も発生していないのだ。しかも、よりによって道中奉行巡検を間近に控えた折である。この難事に恵氏は自ら事件探索と解決に乗り出した。

御所の役人たちには宿場南北の木戸を閉ざさせ、宿泊する旅人への聞き込みに当たらせている。

陣笠を被り、火事羽織に野袴という格好で恵氏は長屋の木戸を入った。頭上に広がる冬晴れの空が殺しの陰惨さと対照をなしている。

白雪の降り積もった路地を大家の勘太郎が案内に立った。

殺しの現場となった家は木戸門近く、軒先に氷柱(つらら)が二本ぶら下がっている。恵氏は氷柱を避け、腰高障子(こしだか)を開けた。中を覗くと土間を隔てた六畳ほどの板敷きに筵(むしろ)をかぶせられた物がある。人の形に盛り上がっていることから茂助の亡骸(なきがら)であろう。

足を踏み入れ、土間を突っ切り小上がりになった式台(しきだい)に足を掛けた。草鞋(わらじ)を履いたままだった。恵氏は躊躇(ためら)ったが、

「土足で結構でございます」

大家の勘太郎が言った。

板敷の真ん中に囲炉裏が切ってあり、梁(はり)から下がる自在鉤(じざいかぎ)に鍋が吊るしてあって水が入っていた。囲炉裏は薪を燃やした跡がある。囲炉裏の奥には箪笥(たんす)と布団が無造作に敷いてあった。土間には備え付けのへっついがあり、竈(かまど)には灰が残っている。

鍋に水があることから、茂助が煮炊きをしたようだ。

草鞋のまま板敷きに上がり、陣笠を脱いで板敷に置くと筵を捲(めく)った。

これまでにも亡骸を見たことはあるが、殺された遺体は初めてだ。恵氏に限らず、喜連川家の家臣、宿場で暮らす者たちも同様であろう。

落ち着け、と自分に言い聞かせ恵氏は亡骸に視線を落とした。

茂助の両目は大きく開かれ、この世に有り余るほどの未練を残すようかの形相だ。見たところ二十代半ばといったとこだろう。

「喉を一突か……」

恵氏は呟いた。

喉笛が真っ赤に染まっている。亡骸の周辺はもとより板敷きの端、土間にも血痕が飛び散っていた。鋭利な刃物で一突きにされたようだ。血痕からして刺されてから板敷をのたうち回り、力尽きたのだろう。

「凶器は……」

辺りを見回した。勘太郎は土間を探した。板敷にも土間にも見当たらない。下手人が持ち去ったのだろう。

凶器は残されていないが財布は箪笥の上にあった。恵氏が調べると一文銭と一朱金(いっしゅきん)、喜連川藩の藩札(はんさつ)が入っていた。全部で二両と一分余りだ。下手人は財布を盗らなかった。盗み目的ではない、ということか。

ならば、恨み……。

「茂吉はこの長屋に住んでどれくらいになる」
勘太郎はしばし思案の後、
「五年程です。九州の……ええっと豊後(ぶんご)の国に産まれだと言ってましただ」
五年前の冬、行倒れになっていたのを豆腐屋の主、金蔵が助けた。金蔵は外商の担い手を探していた。茂助は金蔵の求めに応じて豆腐売りとなった。仕事ぶりは真面目で人当たりもよく、売り先の女房連中からの評判も良かったそうだ。
お得意ばかりかこの長屋でも茂助を悪く言う者はいない。自分は余所者(よそもの)だと辞(じ)を低くして長屋の者たちと接し、寄合いではみなの世話をし、井戸替えのような長屋の共同作業でも率先して働いた。子供たちが喧嘩をしていると仲裁し、女房連中に代わって重い物を持ったりもしていたという。
「茂助の亡骸を見つけた経緯を聞かせてくれ」
毎日、茂助は勘太郎の家に顔を出してから商売に出かけるのだが、今朝に限ってそれがなかった。患っているのか、と心配になり勘太郎は家を覗いたのだった。腰高障子に心張(しんば)り棒は掛けられていなかった為、勘太郎は家の中に入り、茂助の亡骸を発見した。
すると、
「失礼致します」
若い男が入って来た。髪を総髪に結い、薄い灰色の十徳(じっとく)に身を包んで薬箱を持っている。蘭方医五木幹之介だ
五木は恵氏に深々と腰を折ってから茂助の亡骸に両手を合わせ、検(あらた)め始めた。着物を脱がせ、咽喉以外に外傷がないか調べる。入念に確認すると勘太郎が用意した盥(たらい)のお湯で両手を洗ってから五木は恵氏に向いた。
「茂助が亡くなったのは、暁七つ(あかつきなな)（午前四時）以降でしょう。死因は喉を鋭利な刃物のような物で貫き、血が大量に流れ出た為と思われます」
五木は明瞭な声音で報告した。
信頼できる男だ。
勘太郎は肩を落とし、
「毎月、茂助さんは稼いだ金のいくらかをお国のおっかさんに仕送りをしていたんです。ほんと、孝行息子でしたべ……」
と、言葉を詰まらせた。
恵氏も胸が塞(ふさ)がれる思いだ。
伏し目がちに勘太郎は続けた。
「おっかさんに報せてやりますだ。まあず、悲しむでしょうし、あたしも辛いですが……しょうがなかんべ」
「遺髪も添えてやれ。わしも香典を出そう」

恵氏は弔(とむら)いも出してやれと言い添えた。喜連川宿始まって以来の殺しの被害者に、責任を感じずにはいられない。領民の命や暮らしを守るのが御所さまの務めなのだ。
わかりましたと、頭を下げてから勘太郎はおやっとなり、
「そう言えば、茂助さん、死んだら火葬にされたくない、と言っていました。喜連川の寺に土葬して欲しい……茂助さんは喜連川に骨を埋めるつもりだったようです。茂助さんは御所さまに感謝し、畏敬の念を抱いておりましただ」
と、しみじみと語った。
改めて恵氏は茂助の亡骸に視線を向け、おまえをこんな目に遭わせた者を必ず召し捕り、罪を償わせる、と誓った。
「ところで、茂助の家に出入りした者を見かけなかったか」
恵氏の問いかけに勘太郎は申し訳なさそうに見ませんでした、と答えた。
無理もない。
五木の診立(みたて)て通りとすると茂助が息を引き取ったのは早くて暁七つ、夜明け前の漆黒(しっこく)の闇に包まれていただろう。
「長屋の者たちはどうであろうな」
恵氏に言われ、勘太郎は女房連中に確かめてきます、と腰を上げたが、
「わしが聞こう。すまぬが、みなを集めてくれ。ここでは何だから、そなたの家にな」
恵氏は命じた。
頭を下げ、勘太郎は茂吉の家を出た。
恵氏も立ち上がった。五木は茂助の骸に筵をかけた。恵氏は五木に労(ねぎら)いの言葉をかけてから茂助の家に向かった。

長屋の女房連中は揃って茂助の死を悲しみ、口々に真面目な仕事ぶり、人柄の良さを賞賛したものの、茂助の家に出入りした者を見た者はいない。
「あんないい人を殺した奴は鬼ですよ」
「御所さま、必ず、捕まえてください」
という声は聞かれたが、茂助に恨みを抱く者には見当がつかない、という証言であった。財布に金はあり、物盗りの仕業(しわざ)ではない以上、恨みという線でしか殺しの動機は思いつかない。
しかし、茂助は恨まれるような男ではなかった。長屋には茂助殺しの下手人はいない、ということか。いや、そう簡単に決めつけてはならない。
程なくして茂助の主人、金蔵も駆けつけたが茂助の仕事ぶり、人柄を賞賛するばかりであった。

勘太郎によると、夜四(よるよん)つに木戸を閉め、明け六つに開けるまで、木戸門はしっかりと閉じられていた。門が開けば音で気づいたはずだ、と勘太郎は言い添えた。
そっと、木戸門に上り、長屋の中に忍び込む、まるで忍者まがいの真似をすれば可能だろうが、そこまでして茂助を殺すとは、恨みの深さを感じさせる。
すると、恵氏の心中を察したのか勘太郎が
木戸にも雪が積もっていて、人が上った痕跡はなかった、と証言を加えた。
ここで、
「若御所さま、ご自分の目で見て、ご自分の頭で考えて、物事はお決めなされませ」
登恵の言葉が思い出された。
恵氏は勘太郎の家を出ると木戸まで歩いた。勘太郎がついて来る。木戸門や木枠に積もった雪に乱れた様子はない。勘太郎の証言を裏付けている。
外部の者の仕業ではない、となると長屋の者たちを疑わざるを得ない。思案を重ねたところで勘太郎が、
「そう言えば、あたしが茂助さんの家に入った時、家の前に足跡がなかったんです」
今、思い出しました、と言い添えた。
豆腐屋の主人金蔵がやって来て御所さまにお話が、と辞を低くした。
「構わぬ。申せ」
恵氏は金蔵に向く。
金蔵は腰を屈(かが)めたまま語った。
「この二、三日、茂助の様子がおかしかったんです。無口になってため息ばっか吐いて……飯も食わなくて……そんで、具合が悪いのかと思ったんで休んだらどうだっぺって、勧(すす)めたんです……」
茂助は何かに思い悩んでいる様子だったそうだ。
「あいつ、自分が死んだら火葬はいやだ、土葬にしてくれ、喜連川の土になりたい、なんて言いました。わしは、若い身空(みそら)でなに不吉なことを言ってるぺって、取り合わなかったんですがね」
金蔵はしみじみと語り終えた。
茂助の死は自害であった、と思わせる。
自害と考えれば、木戸が閉じられてから長屋内の出入りの痕跡がないこと、家の前に足跡がなかった点に疑問は生じない。長屋の者の犯行ということも除外される。
しかし、茂助の家には凶器が残されていなかった。
更に不可解なのは動機だ。
金蔵によると茂助は思い悩んでいたようだが、自害を意識する程の悩み事とは何だろう。金蔵にも権太郎にも茂助は自分の弔いについて話している。火葬ではなく土葬にして

欲しい、と。喜連川の土になりたい、と願っていたのだそうだ。茂助は喜連川を安住の地、と思い定めていたのだ。それなら、自害などせず、一日でも永く暮らせばよい。女房を持ち、子供を産み、一家を成せばよかったのだ。

茂助だってそれを望んでいただろう。

茂助の死は殺し、自害、両面から見て謎めいている。

「若御所さま、自分の目で見て、自分の頭で考えて、物事は決めなされ……か」

登恵の言葉を口にしてから恵氏は茂助の家に戻った。

まだ五木が残っていた。

三

一礼した五木に、

「茂助の死、どうもはっきりとせぬな」

恵氏は自害の可能性が出てきたことを語った。

五木も思案を始めた。

「自害としたら、凶器が残っていたはずだ」

改めて恵氏は家の中を見回した。

「凶器らしき刃物は見当たりません」

五木は隅々(すみずみ)まで探したそうだ。

検死を終えたのに熱心なことだと恵氏は感心した。

「余計な真似をしたこと、お詫(わ)び申し上げます」

恵氏が口を閉ざしたのを、五木は不快感の表れと受け止めたようだ。

「いや、むしろ感謝しておる。死因を特定するのが役目であるのに、更に踏み込んで真実を求めようとしておるようじゃな」

恵氏が言うと、

「御所さまがおっしゃいましたように、茂助さんは自害なさったのか殺(あや)められたのか、判断がつかない様子となりました。死因は咽喉の傷から血が大量に流れ出てのこと、しかし、それでは真の死因を特定したことになりませぬ。わたしは、茂助さんの死の真実を明らかにしたいのです」

語る内に五木の頬は紅潮した。

「よくぞ申した」
感服すると共に恵氏は頼もしく思った。
「ならば、まず、凶器を明らかにしようではないか」
恵氏の言葉に五木は力強く首肯(しゅこう)した。
恵氏は土間のへっついを見た。へっついの上には明り取りの窓がある。
「茂吉は自害したとして、咽喉を突いた刃物をあの窓から投げ捨てた、とは考えられぬか」
窓を見上げ恵氏は考えを述べ立てた。
五木は土間と板敷の血痕に視線を向けながら、
「茂助さんは囲炉裏端で息絶えました。血の跡は土間にも残っておりますが、へっついの側にはありません。板敷から窓までは一間半程です。息絶えようとしておる者が刃物を投げ捨てるには遠過ぎます。投げたとしても、せいぜい土間に転がるくらいであったでしょう。それに、窓は大きくありません」
五木が指摘するように、窓の大きさは縦が四寸程、横が六寸程だ。
「なるほど、投げて届いたとしても凶器が窓の外に出る、とは限らぬか」
恵氏が言ったところで、
「失礼致します」
五木は家から出て行った。
何処へ行く、とは訊(き)かず、恵氏も続いた。五木のことだ、窓から凶器が投げ捨てられた可能性を考え確かめるのだろう。
案の定、五木は家の右手、隣家との僅かな隙間に身を入れ、這(は)いつくばっていた。雪と泥をかき分け、凶器と思しき刃物を探している。
躊躇うことなく恵氏も探し始めた。
「御所さま、わたしにお任せください。お召し物が汚れますぞ」
立ち上がって五木は止めたが、
「汚れれば着替えればよい。気に致すな。わしは自分の目で確かめたいのじゃ……あ、いや、そなたを信用せぬのではないぞ」
気さくに返し、恵氏も屈んだ。
「御所さまも真実を明らかになさりたいのですね」
うなずき五木は凶器探しに戻った。
恵氏は五木と距離を置き、雪の中に手を入れる。冷たい感触は真実の探求を拒んでいるようだが、それが却(かえ)って恵氏の闘志に火を付ける。万が一、凶器が潜んでいるのを想定し、恵氏も五木も怪我をしないよう手探りを続けた。
四半時程も探索したが凶器らしき刃物は見つからなかった。

恵氏と五木の手は真っ赤になった。霜焼けになりそうだと、恵氏は笑った。
家に戻り盥の湯に二人は手を浸した。すっかり、冷めているがそれでも凍り付いた手にはありがたい。
「凶器を窓から投げ捨てた可能性は消えました」
五木は断じた。
「すると、下手人が持ち去ったということか……」
恵氏は閉じた腰高障子を見た。
「下手人と凶器は消えましたが、人も刃物もこの世から消えるはずはありません」
五木も視線を向けたところで、どさっという音が聞こえた。
「氷柱が落ちたようです」
五木が言うと、
「それだ！」
恵氏は腰を上げ、土間に下りると腰高障子を開け、落下した氷柱を拾い上げた。陽光に煌(きら)めく氷柱を恵氏は逆手に持つと、先端を喉笛に向けた。
「まさしく」
五木も恵氏の言わんとすることを理解した。
恵氏は囲炉裏端に戻り氷柱を鍋に入れた。
「茂助さんは氷柱で咽喉を突き鍋に入れた……氷柱は鍋の中で溶けた、という訳ですね。凶器が消えたはずです」
五木は納得の表情だ。
「茂助は自害した。茂助の主、金蔵によるとここ数日、茂助は思い悩んでいたそうじゃ。弔いの出し方まで口にしていた程にな」
茂助は土葬を望み、喜連川の土に還(かえ)りたい、と願っていたことを恵氏は言い添えた。
「茂助さんは、どうして殺し、と見せかけたのでしょう。わざわざ氷柱で咽喉をつき、湯で溶かす、などという謎めいた所業など自害に不要ではありませぬか」
五木の疑問は恵氏も抱いたことだ。
「誰かを恨み、その者の仕業と見せかけたかったのだろうか」
思いつくままに恵氏は口に出したが、
「いや、茂助は人から好かれておったようじゃ。恨む者はいない。茂助の方で恨む者がいたのかもしれぬが、それも考えにくいな」
と、自分の考えを否定した。
「茂助さんが思い悩むようになったのは、ここ数日ということです。その数日に何があったのでしょうか」

五木は落ち着いて疑問を呈した。
「商いで問題が起きたようではないようじゃ」
「喜連川宿で変わったことは……」
「公儀の道中奉行の巡検が入ることくらいか……じゃが、それが茂助と関係あるとは思えぬがな」
恵氏の言葉に、五木の目が大きく見開かれた。
「いかがした」
気になり問いかけると、
「へっついの下を調べたのです。すると、観音像を茂助さんは燃やしていました」
五木は土間に下りるとへっついまで行き、腰を落としてへっついの下に手を入れた。恵氏もへっついまで歩く。
「これです」
五木は両手で観音像を抱き、腰を上げた。一尺程の観音像は黒焦げとなっているが残骸を留めていた。
「茂吉さんはどうして観音像を燃やそうとしたのか疑問に思ったのです。へっついの下には沢山の灰が残っています。自害を前に色々な物を燃やしたのでしょう。死後、見つかってはまずい物です」
恵氏は灰にまみれた五木の手を見た。
次いで観音像をひっくり返す。
「なるほどな」
恵氏が言うと五木も、「やはり」と唇を噛み締めた。
観音像の裏には十字架が描かれていた。
隠れキリシタンは聖母マリア像を拝む代わりに、観音像を聖母マリアに見立てる。
「茂助はバテレンであったのじゃな。どういう経緯かはわからぬが喜連川宿に流れた。喜連川ならば公儀の追手は及ばぬ、と思ったのかもしれぬ。茂助は喜連川を安住の地と決めていたようじゃ」
恵氏の考えを受け、
「道中奉行の巡検には宗門改もあると知り、キリシタンであることが発覚するのを恐れたのでしょう。先ほど、勘太郎さんがおっしゃっていました。茂助さんは御所さまに感謝し、畏敬の念を抱いていた、と。わたしが思うに、もし、道中奉行に自分がバテレンである、と発覚してしまうと、御所さまにご迷惑がかかることを危惧（きぐ）したのかもしれませぬ。バテレンの教えでは自害を禁じておる、とか。茂助さんが殺しに見せかけたのは、その為でしょう」
五木の推論通りであろう。

「哀れよな」
茂助の心中を思い恵氏は両手を合わせ、冥福(めいふく)を祈ろうと思ったが、キリシタンであるのを思い、躊躇った。
が、
「バテレンは冥途をハライソと呼ぶそうじゃが、あの世であるのに変わりはない。あの世での安寧(あんねい)を祈るに差し障りはあるまい」
と、恵氏は合掌した。
五木も両手を合わせる。
茂助の冥福を祈ってから、
「バテレンは火葬を嫌うそうじゃ。神の審判で復活に際して身体を残しておくのだとか。それゆえ茂助は土葬を望んだのであろう」
恵氏は言った。
「茂助は喜連川の地で蘇りたかったのでしょう」
感慨深げに五木はため息を吐いた。
自分の目で見て、自分の頭で考えて物事は決めなされ、恵氏は内心で登恵の言葉を噛み締めた。
「そなた、学問にも熱心なようじゃな」
ふと、恵氏は五木に問いかけた。
「本腰を入れて蘭方と蘭学を学びたいと存じます」
しっかりとした口調で五木は答えた。

四

鮎の時節となった卯月(うづき)、恵氏は荒川の河岸(かし)にやって来た。夕暮れ時、心地よい川風が恵氏の月代(さかやき)を通り抜ける。
茂助の死は病を苦にした自害として落着し、宿場の寺に土葬された。喜連川宿を巡検した幕府の道中奉行は鍛冶の運上金を要求したが、恵氏は家康が保証した諸役免除を楯(たて)に拒絶した。
恵氏は五木幹之介が蘭方医学や蘭学を学べるよう杉田玄白に推薦状を書いた。間もなく、五木は玄白の天真楼塾(てんしんろうじゅく)に入門する。

登恵の縁を感じた。
めでたし、と安堵したところへ松平定信から書状が届いた。喜連川藩を十万石に加増の上、恵氏に老中就任を求める内容であった。この申し出も、
「喜連川家は徳川家の臣下にあらず」
と、きっぱり断った。
荒川の上流に視線を向けた。山裾が広がり、鳶(とび)が舞っている。春と秋の夕暮れには山裾に狐火が灯る。喜連川では狐の嫁入りと呼んでいる。狐火は喜連川に限らず、日本全国のあちらこちらで見られる。火の気のないところに提灯や松明(たいまつ)のような怪しげな火が一列になって現れ、狐の嫁入り行列の案内に灯されていると解釈される。
喜連川は数多の狐の生息地であるため、ひときわ狐火が目撃され、狐の嫁入りが盛んだ、と伝えられてきた。
恵氏は見たことがない。自分の目で見て、自分の頭で考えて物事はお決めなされ、という登恵の言葉を思い出し、春と秋の夕暮れ、恵氏は狐火を確かめようと荒川の河岸を訪れる。
今日も現れぬかと権兵衛の小屋に向かおうとした。すると、山裾に提灯の灯りが灯った。
目を凝らすと一人の女がこちらを見ている。
「登恵……」
恵氏は川辺に近づこうとした。
女はにっこり微笑みくるりと背を向けた。呼びかけようとしたが、消え去ってしまった。
登恵だったのか狐に化かされたのか……
「どちらでも構わぬ」
心の中に登恵は生きているのだ、これからも、自分の目で見て、自分の頭で考えて、物事は決めよう、と恵氏は決意を新たにした。